

冷酒

ちをゑいぢん有に、なかりければ、いかにと御たづね有けり、藏人などとそうすべきむねもなし
有のまゝにそらもんすてんきことに御心よげにうちゑませ給ひて、林間に酒をあたへめてこ
うえうをたくといふ詩の心をば、さればそれらにはたがをしへけるぞや、やさしうもうかまつ
たる物かなとて、かべつてゑいかんにあざかりしうへは、あへてちよつかんなかりけり、

〔江吏部集中〕七言初冬於左親衛藤亞相亭同賦暖寒飲酒以盃爲韻，并序○序略
暖寒皆導酒爲媒燕飲不知幾許盃、薰甲自然消日月、開眉何必在爐灰、醉中暖露折籌識曆外春風隨
戸催汝號忘憂吾未信、豈圖吾載歷霜臺、

〔臨時客應接〕酒の間は、銅壺歟茶釜にても湯煎にすべし、必直間にすべからず、

〔明良洪範十四〕神君家康○徳川遠州諸所御巡見ノ時、武田信玄是ヲ知リテ、俄ニ出陣シテ追討事甚急
也、此時見附番ノ上村清兵衛ト云者、吾居宅并ニ宿内ヘ三ヶ所一度ニ火ヲ付ケ燒立テ、武田勢ノ
進來ル前路ヲ塞グ略、神君其日ノ清兵衛ガ効キヲ賞シ給ヒ、御指料ノ御刀ヲ御手ヅカラ賜ル、
其後カノ邊へ御出馬ノ度毎、清兵衛ガ居宅へ御立寄有リ、清兵衛酒好ナレバ、常ニ酒ヲ造リ置シ
カバ、其酒ヲ神君ヘモ御供ノ人々ヘモ進ラセケル、此清兵衛酒好キナレド、簡ヲシタル酒ハ呑マ
デ、冷酒ニテ呑ム、或時神君御戯レニ、冷酒清兵衛ト呼ビ給フ、夫ヨリ國中ノ者、皆冷酒清兵衛ト云
テ、新參ノ者ハ冷酒ト云姓也ト思フモ有シト也、

〔書言字考節用集人倫四〕上戸江次第、文選註、白文集註、以飲食多者爲大戸、小者爲小戸

〔松の落葉四〕上戸下戸

酒をよくのむ人を上戸といひ、えのまぬを下戸といふは、いにしへ百姓の戸口をいふに、その口
の多少によりて、上戸中戸下戸といふことのありしかば、酒のむことの多少を、それになぞらへ
ていへるになん戸口のこととは、日本書紀持統天皇の卷に、大臣よりつぎく、宅地をたまふこと

嗜酒